

満州における

難民日記抄

宮城県 村上 ひさの

かしはかどらず。

八月十日

主人より伝達あり、主人たちは先発隊として出発する由。丹精の芋掘り、茹でたのを一籠、主人の乗るトラックに上げる。

九月十五日

どの子も病気なのに征子元気なのは助かる。日中手拭を被せて裸で遊ばせる。お餅（お正月の切り餅代）が一個一円五十銭。あんこが入れば二円。トウモロコシは一本一円。松田さんにニンニク頼む。

昭和二十（一九四五）年八月八日に始まり、翌年八月十八日まで約一年間の記録で、私は当時二十四歳、夫の任地・満州国牡丹江省温春（現中国東北部）にて長女征子（昭和十九年三月生まれ）と三人で暮らしておりました。

乾パン一袋七円、八袋買う。トウミが一番安くて空腹を満たす。朝、高粱ゴウヤンかゆ、おかずなし。夕、麦飯、お煮付け、おいしい。

九月十六日

昭和二十年 八月八日
日ソ開戦という、朝六時、ラジオの放送にて知る。未明の非常召集で雨の降る中、集合のため部隊に出てゆく主人を送る。不安のまま征子を背負い、家の片付け方、午後よりアヤマさんと防空壕の管理を急ぐ、し

岡本さんのケンちゃん三歳、はしかで死亡す、可哀相なり。これで十人目。二度も征子ご不浄に起こしたけれども、その都度お漏し。地がコンクリートなもので夜が冷える。夜寒くて眠れぬまま灯をすかして主人の写真を見る。

九月二十三日

征子、元気で何よりだと思ふ。昨日の下痢も一日で止まり、ほっと一安心。本日は墓三つできてしまった。松田さんに干菓子四個いただき、熱い茶、とても美味しかった。

十月十日

夜、明年の一月十日までに、在中国日系人の引揚げが始まるという。皆大喜びで「元気で帰りましょうね」と誓い合う。本日で墓十四になる。

九月二十五日

練乳缶切る。征子が元気な時に飲ませるのが一番と。大変喜んで飲む。

十月三日

映画館より十分ぐらいで旧女学校の教員宿舎というところへ移動す。立派な住宅なり。しかもここも何もかも持ち去られ屋根と柱のみ。しかし男の人たちが力を合わせて畳の表とかアンペラ等を拾い集めて、まづ床に敷いた。久しぶりに畳に寝たが、裏返しなので体の痛いこと甚だしい。

編成は牡丹江省温春からのトラックの同乗者であるか、あるいは他の部隊の人も入っていたかもしれない。八畳、六畳、合わせ上下段の押し入れも全部に三十六人の女・子どもがまず住むことになり、となりの六畳には、やはり押し入れの分も入れて夫婦と子ども、かつての応接間には二人の下士官、兵隊だった人十五、六人位、それに三畳ぐらいの横部屋は予備にしておいて、お産室と決めておいた。

外のお風呂場は手入れすれば使用可、水道は蛇口から水が出っぱなし、それでも水道があるから助かる。玄関には立派な開き戸がついていて、こればかりは前の面影を留めていた。錠がないので厚い板でパッテンに止める。破れたところには板を張り、裏口の常に人が出入りするところは、幸いに同じ戸があったのを見付けてきて止めた。

十月十三日

林軍属の長女ヨシ子ちゃん、五歳ぐらい、死亡。百日咳の予防注射に征子、松田さんについてもらって町の病院へ。病院は旧満鉄病院。街は物騒なので一人で

は歩けない。女一人で歩けば看護婦として中国の軍隊に連れて行かれる。

本日より共同炊事。釜の下の方が石がじゃりじゃりして盲腸炎にでもなったら大変。伊藤さん、仙台にて部厚い手紙をもらった夢を見たと話す、うらやましい。私は夢も見ない。

噂、マッカーサーが丸の内にて指揮をとっていて、来年の六月までは在中国の口系は帰国させないと言い切ったと。デマらしい。さつき岡崎さんがお部屋でお稲荷さんをやっていたら「私たちは十二月までに帰国できるし、主人たちには四月に会える」とうらやまれている。浦山さんの出産は来月の九日、即ち十一月九日なり。

十一月一七日

百日咳の診断を受けてから征子瘦せた。缶切りで手を切り、終日痛し。あやめさん、松田さん、なまめし売りをやり大儲けしたと。八路軍、街へ入って来た。夕刻、ロシア人二人入ってきて、皆下を向いてブルブル震えていたら、「そんなに心配することない」

という仕草をして「サヨナラ」と言って帰って行った。永江さん、女の赤ちゃん産む。慶子ちゃんと名づける。弁慶の「慶」だと言っている。

十一月一八日

嫌な噂多し。

昭和二十一年 一月二十五日

「光郎さま、いかにお過ごしでいらっしゃいますか」。今日、この棟の男の人たち、高石さん、大石さん、ロシア人の使役に行き、豚肉、二十貨車も積んだんですって、モスクワに行くそうですが、モスクワとかシベリアとか聞きますと胸が痛みます。まさか、そんな遠いところにはおらないと思いますが、とても心配でたまりません。万一のことありはしないかと心配です。

一月三十日

五日分のマッチ箱貼り代金九十円、タバコ二十七個売り上げ儲け三円、とにかくお金が入ったので嬉し。大福一個買って征子に食べさせす。

五月一日

風邪、無事。

六月三日

今日、三日だとすると、私、発疹チフスで何日寝ていたかしら。長沢さんが「バカね、三週間は寝ていたわよ」「うーん、三週間」その間、皆の世話になっていたのか。

噂、牡丹江の部隊の人たち、やはりシュウカにいると。

六月五日

川染さんと征子と三人でハカタヤマまで行ってくる。あそこまで行ってくるのに二回も休む。征子、パン五個五円、饅頭三個三円、マメ板一個二円、下駄は十二円、大根三円五十銭、ところてん二人分二円、征子新しい下駄はいてすっかり大人になった気分。

昨夜売った私の帯が二百円、上衣二十円の入金。こりゃん十斤六十円、ミノ一斤七円五十銭、片っ端からお金飛ぶようなり。征子に卵二個、コンブに卵の汁食べさす。

六月七日

田中さんの節子さん、早朝に死亡。お悔みに五円あげる。本当に弱り切った節子ちゃん、見ていられなかった。

征子帰らず。尋ねしかれど帰らず。征子、征子、中国人に連れて行かれてしまった。幸福台の人たちに頼んであるけれど。

六月八日

城内の方から線路の方まで尋ねたけれど、征子見えず、夜間になる。征子はどこでどうしているのだろうか。夜眠れず。「征子！ 征子！」呼べどいない。尋ね歩いてみると、孔子廟付近を泣きながら行ったり来りしていたのを黒服の中年男、おんぶして、泣いている征子を連れて行ったと。中国人のサンネン女性という。泣く子をおんぶし、どんどんずーっと遠くに行きしとのこと。中国人小兒十三歳位曰く、但し確実ならず。

中国人部落、一軒一軒見せてもらえどおらず。

六月九日

あの時、線路の方、二時間も捜していたのが落ち度

にて、四歳の男の子の話のみ信じるが不注意。孔子廟の方探せば征子泣いていたのなり。見付かるかしらと気が狂いそう。どうしているかしら、と思うと胸がいつぱいになる。幸福台の方、よろしくお願ひします。私は一日も早く病気を全快させて、吉林の街を煙草を売りして捜さねば、最後に引き揚げる民団本部と共に帰国の駅で捜さねば。

六月十二日

朝、夢に初めて征子を見た。征子帰ってきて「征子ちゃんどこへ行ってたの」と言っただっこしておっぱいを含ませてやる。頭にいつぱい虱が湧いていた。

七月二十二日

急に帰国の話あり、明日とのこと、慌てる。中国人のところ、十五日洗濯して四百円、これで漸く七百円位になるので、ますます何とか間に合うのではないかと思う。

最後にあの子のこと、中国警察の宋さんにお礼を述べ、日本の住所と征子のことを託す。実に寂しい一日。本日の買ひ物、帽子十五円、飴二十五円、下駄三

十円、ねりんぼ三十円、パン六十円、納豆六十円、味噌八円、ニラー一円、「ゲートとシラー」(古本)十円、北極紀行(古本)三元、キューリ六円、コーリヤン十斤、薪五斤六円。

七月二十三日

征子四十九日目。早朝雨。例のごとく蠅に起こされる。ボンボンとはの暗い中から話し声、それに誰かが応えている。夢うつつに聞いていると、二小隊の大沢さんがいらして「本日八時半までに前の電話前に集合のこと」、松本さん、あやめさん、川染さんに伝えておいてまたひと眠り。

まだ征子を尋ね当てないで第二次吉林引揚げの人波に揉まれることを考えると胸痛し。仕事をしている内に時間が経ち、仕方無く支度。あの子を残すことを考えると、そちらの隅で立ち、こちらへ行つたため息。

八月一日

不意に出発の命令が来る。朝方用意したコーリヤン二食分携行。コロ島の一步手前の駅まで出発のとこの。十時まで駅集合の命令あり。湯沢さん下痢のため

すっかり弱っておられる。一足遅れて出発とか。病院列車が近く出るらしい。いよいよ日本に向かって出発となると、あの子が目に見えぬ。井戸の近くで「おかあちゃん、おかあちゃん」と泣いている子を見ると、征子を見るようでもたまらない。

吉林は五十一日目に出発してきたけれど、もう少し尋ねて見たら良かったかしらと。征子よ、本当に済まないことをしてしまった、征子、私は故国に還えるけれども、必ず探しに行くから、それまで健康であれ、そのみ祈るばかり。

長い列を連ねて、早朝奉天収容所より奉天（瀋陽）駅に向かう。砂埃の悪路を一時間揺られて、同駅についた時には七時を回っている。通りすがりのご不浄の前に死体が横たわっていて、蠅がブンブンして固くなっている。折からの日光に照らされて、誰か取り片付けるでもない死体、惨めであると思う。日僑検査所と書いてあって、茨の針金で囲いがしてあるところが待ち合い所で、アンペラで日覆がしてある。地べたに腰を降ろして休んでいるが、十時までに集合の由なれ

ど、やがて日は中天に届けど音沙汰なし。

八月二日

昨夜十二時頃だったろうか、ウトウト寝ていたら起こされて乗車。そのころから弓ちゃんが苦しみだす。太ってくるくるしているから死ぬようなことはないと思つてのんきに構えている。

やがて、あまりにも苦しみ、引き付けるようになった頃は二時頃であろうか。とにかく引き付けるからアツという間に亡くなったのである。太つてまるで征子を思わせるような、おとなしい可愛い子である。何とも言えない。本当に死んだとは思えない。コロ島への貨車での上り。

正午過ぎ、広大な風景の中を水牛の群れを見て通り過ぎると、また寂しい曠野。その寂しい曠野に下車。金県郊外とのこと。蠅一匹もない宿舎。弓ちゃん、母さんの胸に抱かれて眠っている。なにやら胸が痛い。

八月三日

昨夜は雨。敷いていた毛布を被ってまた寝る。毛布

の上にしぶきを感じながら、夕方になって松本さんの弓ちゃんを埋葬。皆でお送りする。雨に濡れた草原をついてゆく。元飛行場らしい。ここまでできて亡くなる方多いらしく真新しい土盛が並ぶ。その中に弓ちゃんを置いて、野の花、小さな草花を皆で集めて、幼い弓ちゃんの冥福を祈った。

松本さんは「もう一度主人が戻ったら、中国へ来るわ」と言った。「私も、私も、どうしても一人でも来なくてはいけない」。松本さんに付いて行って全員の民難所に行って死亡届けを出す。

夜、二人とも明日より炊事当番に当てられる。征子と弓ちゃん、果たしてどちらが幸福なのかしら。

八月十八日

船室で見えていたら大波が降りかかって全身が濡れ鼠。昨夜は眠れなかった。征子と主人のこと考えて。早朝「島が見える」とのひと声に皆甲板に飛び出す。

夕べの時化はどこへやら、海は凪ぎ、太陽が輝かしい。誰かが「日本の松はいいな」と言っている。島に白い灯台が立っていた。この四夜五日の船旅は実に

ホッとする、

午前十時佐世保着。

コレラの発生があるとかで、四、五日上陸禁止と。病院船やほかにこの種の船がそちこちに停泊。

後日のはなし

その後、光郎は二年間のシベリア抑留を経て、昭和二十二年十一月十三日に帰国した。昭和五十五年七月十三日より十二日間、中国残留孤児探しの旅に参加し、中国東北部、長春、哈爾濱、吉林等を訪問したが、何らの手掛かりも掴めなかった。

昭和六十年十一月二十二日、東京代々木の青少年センターで厚生省中国残留孤児探しの第九次訪問団の中から征子を捜し当て、再会を果たした。時に征子四十一歳、父・光郎六十九歳、母ひさの六十三歳。

昭和六十一年秋、征子は夫、二人の息子、娘夫婦の五人と共に永住帰国した。

難民日記を整理して

今を去る五十五年前、即ち昭和二十年八月、満州にて、当時一歳五カ月の子を背負い、途中、日本が戦争に負けたと聞いての逃避行であった。

日常生活を捨ててと言うか選んでと言うか、持つものは主として子どものおむつであり、幾枚かの着替えと食料、と言っても乾物少々に限られている。唯一、子どもの頭ほどのチーズがあった。固くてそれは電線の皮を剥ぐナイフで削っても、女の手では葉ぐらいしか取れなかったのが幸いして、翌年の四月ごろまで長持ちした。子どもの栄養補給源になったと今は考えております。

変転目まぐるしい日常、赤ん坊や子供達との無一物に等しい集団、高騰する物価、暴動、餓死、病死、一軒の民家に八十人ほどが寝泊まりし、その中でほとんどの子供が死に、赤ん坊が死に、そこが空席でようやく寝返りができる、それはそれは窮屈極まりない生活でした。

初めは何人かのグループに分かれて、それぞれ経済

を考えて食事をしていましたが、吉林に落ち着いた時から共同炊事になります。団費として費用を出し合って生活しましたが、最小限二食なので、食べればさらに空腹を増す始末。中国は食べ物の国だから物はあるのですが高い。身に着けている比較的高価なものを売って、買い物をして一時凌ぎをしますが、すぐ種は尽きる。

どうか一冬は過ごしましたが、次の冬はおぼつかないものでした。

私は現在、紛争のある国々で難民生活を強いられている人々のことを考えますと、いかに平和の有り難いこと、平常の生活の貴重であることを痛感しています。

本当に戦争は、どんな事情がありましても、諸悪の根源でございます。どうぞ平和が永く続きますように。

なお私の征子は三十三年六カ月と十六日ぶりに再会できました。

【解説】

中国残留日本人孤児問題早期解決の方策

昭和五十七年八月二十六日

(中国残留日本人孤児問題懇談会)

第九次訪日調査は、村上征子さんのごとく幸運な人は少なかった。訪日者百三十五人中判明者は三十三人であるので、判明率はわずかに二四・四パーセントに留まり、親との別離時の年齢の低さと、戦後四十年という歳月を経ていることから、残留孤児の親捜しは困難であることを示すものである。このような状況下、村上征子さんの判明がいかに幸運であったか、ということとであります。

この様な事情にかんがみ、残留孤児問題懇談会（厚生大臣諮問機関）の発足が昭和五十七年三月ということとは、戦後三十六年半も経過してから、漸く正式に緒に就いたということである。もちろん、昭和五十年三月末までに百八人を受け付け、懇談会発足までの受け付け合計は一万四千八人という少数であるという。村上さん親子のお話を直接に聞かせて頂いた人々は、

終生胸の痛みを忘れることはできないでしょう。

ここに、解説という意味を含め「中国残留日本人孤児問題会資料」の概要を抜き書きします。

中国残留孤児をめぐることは、永年の悲願である肉親捜しをはじめとして、中国に残る養父母等の扶養、帰国後の日本語の習得や就職など、早期解決をしなければならぬさまざまな問題が残されている。これら諸問題の解決は国民の深い関心事である。

当懇談会は昭和五十七年三月に発足し、以来五カ月余りの短期間であったが、中国残留孤児問題の早期解決のため具体的方策について、審議を行ってきた。中国残留孤児問題全般についての当懇談会としての意見をとりまとめたので提出する

一、孤児問題についての基本的考え方

中国残留孤児は、終戦前後の混乱のさなかに、幼くして肉親と離別し、長きにわたり自分の身元を知らな

いまま今日を迎えた人々である。

終戦前、中国の旧満州地区（現在の東北地区）に

は、開拓団員、南満州鉄道の職員として移住した一般邦人約五十万人が在任していたが、昭和二十年八月九日の日ソ開戦以後は、これらの人々はそれまで住んでいた土地を追われることとなり、避難の途中、酷寒の下において収容所で越冬する間には混乱、飢餓、伝染病の流行等により、翌二十一年五月までに約十八万人の人が死亡するという極めて悲惨な状況に追い込まれた。このような状況のなかで、多くの子供たちが、親兄弟と生別又は死別し、孤児となって中国人に引き取られた。

昭和二十一年から旧満州地区からの邦人引揚げが開始され、大多数の邦人は帰国することができたが、中国人に引き取られた孤児は、自分の身元も知らぬまま中国で養父母に育てられ、成人して今日に至っている。

孤児問題を考えるに当たっては、孤児がこのように過去の不幸な戦争のなかで肉親と離別し、昭和四十七年の日中国交正常化までの長い間、自分の身元を明らかにしたいと思いがらその方法さえないまま、中国

で暮らしてきたことを忘れてはならない。

孤児が自分の身元を明らかにしたいと願うことは、人間の本性に立った自然の気持ちであり、孤児となった事情を考えれば、身元調査の依頼を受けた日本政府が全力を挙げて肉親捜しを行うべきことは当然である。また、孤児がその家族とともに日本に帰国することを望む場合には、政府、国民が一体となって、その受入れ、日本社会への定着のための援助を行う必要がある。

特に、肉親捜しは、中国の養父母も含め、肉親等の関係者が既に相当高齢に達していることから、一刻の猶予も許されない。しかし、中国政府の協力なくしては肉親捜しを進めることはできない。過去の経緯にもかかわらず、中国政府は、これまで人道的な立場及び日中友好の立場から、肉親捜しに全面的に協力してくれている。日本政府としては、中国政府の暖かい配慮と、孤児を育て見守ってくれた中国の養父母や中国社会に対する感謝の気持ちを忘れずに、中国政府の意向も十分に尊重し、日中友好の立場に立って肉親捜し

を進めていく必要がある。

孤児の肉親を捜すことと、孤児が自らの定住地などをどこにするかとは別な問題であり、帰国後の生活が容易でないからといって、肉親捜しに消極的であつていいということは決してない。

これまでに帰国した孤児たちは、さまざまな困難を乗り越えて日本社会に定着するために努力している。

日本社会に定住し、自立した孤児たちは、日中両国の生活、文化にも通じている貴重な存在として、将来は、ますます深まる日中友好の「架け橋」としての大きな役割を期待できよう。と、懇談会は述べている。

◎ 昭和六十年七月二十二日、同懇談会は「中国残留日本人孤児に対する今後の施策の在り方について」

更にさかのぼって、

◎ 昭和五十八年四月八日、閣議3解事項においては

「中国残留孤児の養父母等の扶養に関する援助等について」

◎ 昭和五十九年三月十七日、厚生省援護局は「中国

残留日本人孤児問題の解決に関する日中口上書の交換について」

◎ 平成五年十二月十五日、厚生省社会援護局は「中国残留日本人の帰国に関する日中間の口上書の交換について」、中国残留日本人の日本への里帰り（いわゆる一時帰国）に同意した。

このように、長い年月を要したが、日中間の懸案、特に日本関係者にとっては積年の願望が解決しつつあったのである。

村上ひさのさん一家にもようやく春が巡り来て、今は日本内地で願望の生活をされているのである。このことは、平成十三年十月七日、宮城県小牛田町公民館の、「戦争の労苦を語り継ぐ集い」に出席され、戦後の苦しみと、再会後の喜びを語られたのである。

（星沢）